

フレッシュライター
インタビューニュートラルに脚本と向き合って
〜連続ドラマを書き通して〜

松田 沙也 (シナリオライター)

シナリオ・センター出身のライターが、今まで一人、大きく羽ばたこうとしている。1月期の連ドラ『明日、ママがいない』(NTV 監修…野島伸司)を全話書き通した松田沙也さんである。同ドラマは、児童養護施設を舞台に、さまざまな事情で親と離れた子どもたちを、子どもたちの目線で描いた作品である。社会的に大きな反響を呼び、話題となったが、実は松田さんにとっては、ドラマでのデビュー作であった。これまでの軌跡と、ドラマ執筆について話を聞いた。

●アニメでシナリオデビュー

——シナリオ・センター入学のきっかけから伺いたいのですが、シナリオライターというお仕事を意識されたのは、いつ頃から？

「きっかけといっても、あのドラマを見てとか、この脚本家さんが好きでとか、実はそういう理由ではなかったんです。私は89期シナリオ作家養成講座に入ったんですが、脚本家になろうと思ったのは、その3日前でした」

——えっ？(笑)

「当時は会社員として学習塾に勤めていたんですが、その通勤の電車の中でふと『あつ、脚本家になろう！』って思ってた(笑)。どうすればなるのかわからなかったんで、調べてみたらしナリオ・センターというところがあった、半年間の講座が3日後から始まるというので、駆け込みで申し込んだんです」

——それまでドラマはよく見てましたか？

「高校時代は演劇部でしたし、お話を作ることも好きだったので、ドラマも映画もよく見ていました。大学でも映像実習の授業を取っていたので、もともとこの世界に興味はあったんですね。ただ、脚本家という道が見えたのは、まさにその瞬間でした(笑)」

——講座に出てみていかがでしたか？

「面白かったです。シナリオ・センターで知り合う人は、良きライバルで相談相手でもありました。私、ひとりだとどうしてもガラけてしまう性格なので(笑)、周りがライバルだらけ、という環境が良かったのかもしれないですね。ゼミ仲間と飲みに行くと、どうしたらデビューできるのか、よく話してました」

——松田さんのデビューはアニメで、コンクールは、小説のほうで賞を取られています。シナリオでは取られていないんですね。

「ええ。受賞した小説は、苦手な恋愛モノを

今思えば、アニメというジャンルに無意識のうちには偏見もあったのかもしれない。でもやってみたら、アニメも基本は実写と同じだなと思いました。むしろ設定がファンタジックなぶん、人間の感情はリアルでなければならぬ。切ったら血が出るようなキャラづくり、セリフが必要なんだと実感しました」

——アニメの執筆は初めてですすね。

「私の書き方が、どちらかというと神様目線で物語を進めていて、予定調和だったんだと思います。ハッと気がついて、これじゃいけないんだと。登場人物一人ひとりの視点まで降りて書くことで、血肉が通い人間味が出てくるんだなと。そういうシナリオの基本を、一から叩き込んでもらった現場でした」

——役者さんの演技に頼れない分、もっとむずかしいのかもしれないですね。

「でもアニメも、監督さんのコンテの切り方とか声優さんの演技でどんどん良くなるし、パワーアップしていくんです。キャラクターデザインや絵コンテがあがるとワクワクしましたし、アフレコで、自分の書いたセリフを声優さんが喋ってくださったときは感激しました。自分の担当回が放送されたときは、正座をして見ました(笑)」

●キャラ立ての勉強になったゲームシナリオ

——ゲームシナリオも書かれていますね。

「ゲームシナリオは、ライターさんつながりで、『やってみませんか?』と誘っていただいたのがきっかけです。まずは何でもやらせていただいて、レバトリリーを広げたいと思っていたので、基本から教えてもらいながら書きました。アニメもそうですが、ゲームも今まであまり触れたことがなかったジャンルで……いちから学ぶことも多かったですが、いろいろな発見があったので、やってよかったなと思います」

——発見とは？

「ゲームはキャラクターの動きや表情が限られてくるので、そういう制約の中でどれだけ人物を際立たせることができるのか……キャラクターを生かす勉強になりました。原作ものは、すでに熱心なファンが付いていますし、ファンの方のほうがあるキャラについてよく知っていたりしますので、原作を大事に、人気キャラの分析もしてシナリオを書きます。いつもキャラのことを考えるクセがつきました。あとは、ストーリーの練り方。ゲームシナリオの組み立てって、とても繊細で緻密なんです。何本ものルートが複雑に絡み合っていて、でも絶対に矛盾があってはならない。構成表なんて驚くほど長いんですよ」

——新海誠監督の長編アニメ映画では脚本協力をされました。どのような経緯で？

「最初にやらせていただいた『星を追う子ども』は、やはりライターズバンク経由で、ア

克服しようと思って書いた恋愛短編でした。初めてのコンクールで賞をいただけた小説とは真逆で、シナリオのほうはなかなか……ヤンシナやテレ朝など毎年出していました。1次は通っても最高で2次審査止まりでした。小説のほうに向いているのかと一瞬迷ったり(笑)。ちょうどその頃、友人がアニメの賞を取ったんです。脚本って実写に限らず、いろんな可能性があるんだと思って、ライターズバンクのアニメのコンペに応募しました」

——それがデビューにつながった『PERSONA 3 FES.』ですか？

「そうですね」

——ホン打ちとかはいかがでしたか？

「最初は大変でした。チーフライターさんに怒られてばかりで、泣きたくなったことも(笑)。脚本家として本当に未熟だったので、怒られて当然だったんですけど。こんな新人に、よく根気よく付き合ってくださったなと思います」

ニメのお仕事経験がある人が15人くらい集められて、新海さんの企画案をもとに、プロットを出すというコンペでした」

——松田さんのプロットがなぜ選ばれたのか、そのときに何か言われましたか？

「当時、新海さんの作品はどちらかというと男性ファンが多くて、今後は女性ファンを増やしていきたい、というようなことは伺っていたので、女性目線がよかったのかも。新海さんからは感覚的にフィーリングが合うというところ、キャラの動かし方や考え方の方向性が似ているとおっしゃっていただきました」

——その後も新海さんの『言の葉の庭』で脚本協力をされました。再度のお声掛けということ、それだけ信頼が得られていたわけですね。『言の葉の庭』は、ストーリー展開ではなく、繊細な気持ちの揺れをていねいに描く手法で、実写よりもドラマっぽいですね。

「そうですね。新海さんは独特の世界観をお持ちですが、人物の気持ちを大事にする、その人物の視点を通して世界や物事を見る、ということを学ばせていただきました。このことも、今とても役立っています」

——今は事務所sacca(株)に所属されていますね。

「実はそれもライターズバンクです。おかげさまでバンクを最大限利用させていただきました。ここまで切り開くことができました(笑)」

——やはり実力があればこそだと思います。



●松田沙也(まつだ・さや)

千葉県出身。シナリオ・センター作家集団Fクラス出身。2008年アニメ『PERSONA・trinity soul』でデビュー。以後、ドラマ・アニメ・映画・ゲームなど手掛けるジャンルは多岐にわたる。「受賞歴」第7回新風舎恋愛文学コンテスト(短編小説)優秀賞受賞。「作品歴」TVドラマ『水球ヤンキース』(CX)『明日、ママがいない』(NTV)TVアニメシリーズ『PERSONA・trinity soul』映画アニメ『言の葉の庭』星を追う子ども(共に脚本協力)配信ドラマ『Otogi★Club』『つるのおんがえし』同『くぐりやめ』ゲーム『アークセル・ワールド・加速の頂点』同『銀翼の覚醒』『ぬらりひょんの孫』百鬼繚乱大戦』『涼宮ハルヒの追想』他。今後はTBS連ドラ1月クール脚本予定。

●『明日、ママがいない』を書き通した!

—今年は、1月期クールの連ドラ『明日、ママがいない』を全話書き通されました。マスコミでもかなり話題になっていたドラマです。たぶん皆さんご存知だと思いますが……。オフアアが来て、引き受けられたときの印象や気持ちをお聞かせいただけますか?

「非常にデリケートな話だと思いました。登場人物が親に捨てられた子どもたちですから。でも作ってしかるべき、世に訴える価値のあるテーマだと思いました。ためらいや迷いはなかったですね。生きていくということ、人を愛するということ、そして家族の在り方など、人間の根源に迫るものでしたので、ぜひやらせていただきたい、という気持ちで勝っていました。」

それに登場人物たちが愛おしく思え、心が揺り動かされました。ぜひこの子たちを書いてみたいという気持ちになりましたね」

—脚本家魂が震えた、という感じですかね。野島伸司さんとの本打ちはいかがでしたか?

「お会いする前は緊張で震えました。でも、緊張感がある中にも穏やかな空気を作ってくださって。直しはもちろんたくさん出ましたが、すべてが経験に裏打ちされたことで……。例えば私は、連ドラ全体を通して見るということが、やっぱりなかなかできない。そこを

野島さんは俯瞰で見てくださるんですね。そのうえで、各話がどうしたら面白くなるのか、視聴者の方にテーマを届けるにはどうしたらいいのか、私の弱点は何なのか……。多くのことを教えていただきました。これから先、脚本で迷ったとき、よりどころとなっていく宝だと思います。作品にとっても、私にとっても、とても大きな存在の方です」

—役者さんたちはいかがでしたか?

「子役さんたちの役に入り込む力がすごいなと思いました。顔合わせのホン読みに同席したんですが、まだホン読みの段階なのに、号泣するシーンだと、涙を流して読んでいます。プロ意識がすごくて、役そのものを生きているという感じで、緊張感がありました」

—一部のマスコミからは、ドラマの後半、見解を変えたのでは、と言われましたが?

「それはありませんでした。最後まで見ていただければ、きっとわかっていただけるはずと。チーム一丸となって作品に信念を持ってやっていたので、そこがぶれることはなかったと思います」

—シナリオの技術で習うアンチテーゼや、アクション、リアクションで人物の気持ちや行動が進行していくと知っていれば、構成上の意図や計算だということがわかるんですが、「ドラマとは変化である」ですから(笑)。

「そういう意味では、ドラマの神髄が詰まっているドラマだったと思います。私にとって

で、悲劇を書くことに比べると、喜劇を書く方が、一段とむずかしいかもしれないですね。

「例えば、私の好きな映画作品で、『ライフ・イズ・ビューティフル』があります。第二次世界大戦時のユダヤ人収容所のお話で状況はとても深刻なんですが、親子の絆をコメディタッチで描いていて、だからこそ泣けるし、胸に残る。ああいうさじ加減がすばらしいと思います。」

脚本のオフアアをいただいたら、その題材の中で、ここを言いたい、書きたい、というのを見つけて、ドラマとして膨らませていく……。そうやってひとつひとつ形にしていけたらと思います」

—松田さんの長所って、ご自分ではどのようなところだと思いますか?

「脚本との向き合い方では、柔軟性があるというか、フラットというか、精神的にはいつもニュートラルで、安定して作業できる状態

初の連ドラでしたが、野島さんはじめ素晴らしいスタッフ・キャストの方に出会えて、貴重な経験をさせていただいたと思います。あとは見ていただいた方の心に、明るい何かが残っていればいいなと願っています」

●ライターズバンクを活用しよう

—そして、7月期深夜の連ドラ『水球ヤンキース』(CX)にも参加されました。

「4話、7話、8話を書かせていただきました。実は最初、プロデューサーの方と全く別の案件でお会いしていたんですが、その時にこの企画のことを知って。『真夏に、ちょっとおバカな男子高生がブルで青春!』なんて、文字だけでもうサワヤカですよ。やっぱり夏はこういうスカッとするドラマが見たいなあ、と素直に思いました。その後、運よく声をかけていただいて、途中から現場に入ることができました」

—水球がテーマでした。

「水中の格闘技」と言われる水球をやるというところで、役者さんたちは身体づくりをしたり練習をしたり、大変だったと思います。オンエアではキャラがみんな生き生きとしていて、こちらまで元気をもらえました。脚本の面白さだけでなく、役者さんの演技や監督の演出など、総合力で見せていくのがドラマなんだと改めて思いました」

態でいたいと思っています。打ち合わせはキャッチボールなので、思わぬ方向からボールが来ることもある。誰かの意見でも自分の中にいったん入れて、濾して生み出す。そこに自分の言いたいことを集約させていけるように心がけています」

—最後に後輩へアドバイスがありましたら。「某マンガの『諦めたら、そこで試合終了だよ』は名言だなあ、と。同期で今も書き続けている人は多分3、4人くらいだと思います。私はシナリオのコンクールには落ち続けていましたし、実写にこだわっていたらもっと回り道して、ここまで来られなかったかもしれない。アニメもゲームも実写も、全部が私にとっては大切なお仕事で、大切な経験になりました。今となつてはその道を通ってこなかった自分は想像できません。なので、まずは書き続けてチャレンジを続けてほしいです。シナリオ・センターの宣伝広告みたいですが(笑)、私はライターズバンクをフル活用してお仕事につなげてきたので、ひとつのサンプルとして参考にしていただけたらな、と。」

まずは課題を頑張って作家集団クラスまで進んで、バンクに入って、積極的にコンペを活用されたらいいと思います。……なんだか偉そうなことを言っていますが、実は私も、研修科は2年くらいかかってようやく卒業しました(笑)。諦めなくてよかった、を実感しているひとりです」

(終)